

令和 8 年度第 2 回大学等の質保証人材育成セミナー

演習編 事前ワークのご案内

教育改善を「動かす」人・情報・意思決定のつながりを考える

1. このワークのねらい

第 2 回セミナーでは、自大学で実際に取り組んでいる、または改善したい教育上の課題を一つ取り上げ、その課題について、大学の中の誰が何を知り、どのような情報や専門性、権限、支援を持ち、それらがどのようにつながっているのかを考えます。

大学には、

- 教育上の課題をよく知っている人
- 必要な情報やデータを持っている人
- 情報を整理・分析できる人
- その意味を教育の文脈で考えられる人
- 大学としての方向を示す人
- 実際に改善を決められる人
- 改善を実行したり支援したりできる人

が、それぞれ存在していることが多いと思います。

しかし、それぞれの人が個別に活動しているだけでは、教育改善が自然に動くとは限りません。

例えば、

- 教員は学生の変化に気づいているが、IR 担当者には伝わっていない
- IR ではデータを分析しているが、その結果を学科の教員と一緒に考える機会がない
- 教育課題は共有されているが、誰が改善を決めるのか分からない
- 改善策は決まったが、必要な支援や予算につながらない
- ある学部でうまくいった取組が、他の学部には伝わっていない

といったことが起こります。

今回のワークで考えたいのは、

必要な人や情報が「あるか、ないか」だけではなく、それらが実際に教育改善のためにつながっているか

という点です。その上で、

どことどのつながりを少し変えれば、教育改善がもう少し動きやすくなるかを考えることを、この演習のねらいとします。

なお、本ワークは第 1 回セミナーの参加を前提とするものではありません。第 1 回では質保証・質向上を「動かす」機能を 8 つの視点から整理しましたが、第 2 回では、具体的な教育課題を題材に、人・情報・専門性・権限・支援の「つながり」に焦点を当てます。第 1 回に参加され

た方は、必要に応じて前回の視点も参考にしてください。

2. 事前をお願いしたいこと

事前にお送りするワークシートを用いて、自大学で実際に改善したい教育上の課題を一つ選び、その課題に関係する人や組織について整理してください。

課題は、

- 学修成果
- 学生調査
- 成績・単位修得
- 休学・退学
- カリキュラム
- 授業改善
- 学生支援
- FD
- 教育情報の活用

など、教育改善に関わる具体的なものを想定しています。

例えば、「授業外学習時間が伸びない一方、アルバイト時間が増えている。学修成果への影響が心配である。」といった課題です。

「IRを高度化したい」「内部質保証を強化したい」といった大きなテーマよりも、**実際に何が気になっていて、何をもう少し良くしたいのか**が分かる課題を選んでいただくと、当日の議論がしやすくなります。

ワークシートには記入例も付けています。記入例は正解を示すものではなく、考え方のイメージをつかんでいただくためのものです。すべての欄を埋める必要はありません。

「誰が担っているのか分からない」「必要な情報はあるはずだが、どこにあるのか分からない」といった記載も歓迎します。それ自体が、教育改善を動かす上での重要な手がかりになります。また、機密情報や個人情報を記載する必要はありません。

3. ワークシートで整理する8つの役割

当日の事例報告でも関連する内容を扱いますが、事前ワークのために、それぞれの役割を簡単に説明します。

① 課題を知る人

学生や授業担当教員、学科教員、学生支援担当者など、日常の教育や学生対応を通じて、
「何かおかしい」
「最近こういう学生が増えた」

「この授業で学生がつまずいている」
といった変化や違和感を知っている人です。
数値になる前の情報や、現場でしか分からない状況を持っている場合があります。
自大学では、今回取り上げる課題を一番よく知っているのは誰でしょうか。

② 情報を持つ人

IR、教務、学生支援、各学部等は、それぞれ異なる情報を持っています。

例えば、

- 学生調査
- 成績・GPA
- 単位修得率
- 不可・未修得科目
- 卒業・留年
- LMS 利用状況
- 学修成果
- 学生相談
- 奨学金や経済支援
- 学部・学年別の状況

などです。

今回の課題を考えるために必要な情報を、誰が持っているのでしょうか。

また、一つの部署に集まっているのでしょうか。それとも複数部署に分散しているのでしょうか。

③ 整理・分析する人

生のデータをそのまま見るだけでは、何が起きているか分からない場合があります。

IR 担当者等は、

- 年度推移を見る
- 学部・学年別に比較する
- 学生属性別に見る
- 成績や単位修得との関係を見る
- グラフ等で可視化する

といった形で、情報を判断しやすい形に整理することができます。

自大学では、必要な情報を「考えられる形」にしているのは誰でしょうか。

④ 意味を考える人

分析結果が出ても、その数字だけでは教育上の意味は決まりません。

学科・学部の教員、学生、学生支援担当者、FD・教育開発担当者等は、

なぜこの数値になっているのか

学生は実際にどう感じているのか

授業・カリキュラムのどこに関係しているのか
といった背景や文脈を考えることができます。
自大学では、データと教育現場の経験を一緒に見て、その意味を考える場や人がいるでしょうか。

⑤ 方向を示す人

教育上の課題が見えても、すべてを同時に改善することはできません。

学科長、学部長、教育担当副学長、内部質保証の責任者等には、

これは大学として取り組むべき課題なのか

何を優先して確認・改善するのか

という方向を示す役割があります。

自大学では、課題の優先順位や取組の方向を示すのは誰でしょうか。

⑥ 決める人

改善内容によって、実際に決定できる人や組織は異なります。

例えば、

- 授業方法なら授業担当者
- カリキュラムなら学科・学部
- 時間割なら教務
- 予算や全学的な仕組みなら執行部

というように、課題によって決定主体が変わります。

今回の課題について、誰が何を決められるでしょうか。

また、課題を知っている人と、実際に決定できる人はつながっているでしょうか。

⑦ 実行・支援する人

改善策を決めても、それだけでは実際の変化は起こりません。

授業担当者、学科・学部、教務、学生支援、FD・教育開発、IR、情報システム等が、

- 授業を変更する
- 学生を支援する
- 追加分析を行う
- 専門的な助言を行う
- 必要な予算・システムを用意する

など、実際の改善を行ったり支援したりします。

自大学では、改善を実行する人と、それを支援する人につながる仕組みがあるでしょうか。

⑧ つなぐ人・場・仕組み

大学には、必要な人材や情報が既に存在していても、それぞれが別々に活動していることがあります。IQA 担当者、企画担当者、IR 担当者、教育担当副学長等が人や情報をつなぐ場合もあれば、定例会議、レビューの手順、情報共有の仕組みそのものが「つなぐ」役割を果たしている場

合もあります。

今回の課題について、必要な人同士をつなぐ役割は、誰が、またはどのような場・仕組みが担っているでしょうか。

4. 特に考えていただきたいこと

ワークシートを記入した後、全体を眺めてみてください。

今回考えていただきたいのは、必要な人、情報、専門性、権限、支援は大学の中にある程度存在しているのに、それらが十分につながっていない箇所はないか、ということです。

例えば、

- 課題を知っている人と、情報を持っている人
- 情報を分析できる人と、その意味を考えられる人
- 問題を知っている人と、改善を決められる人
- 改善を決める人と、実際に支援できる人

の間が切れている場合があります。

ワークシートの「ボトルネックを考える観点」は、こうしたつながりを考えるためのヒントとして示しています。

その上で、どことどこをつなぐを一つ変えると、改善が動きやすくなるかを考えてみてください。

新しい組織や委員会を作ることだけが解決策ではありません。

- 情報を届ける相手を変える
- 同じデータを一緒に見る
- 既存会議のメンバーを少し変える
- 会議に「報告」ではなく「判断すべき問い」を出す
- 学部と支援部門をつなぐ
- 他学部の経験を共有する

といった小さな接続の変更も考えられます。

また、授業・教育プログラム・学部・全学といった異なる階層の間で情報や課題が行き来しているか、IR・FD・教務・学生支援等の異なる部門が横につながっているか、という「タテ・ヨコ」の接続にも着目してみてください。

5. 当日の演習について（予定）

当日は、事前に記入いただいたワークシートを用いて、少人数のグループで意見交換を行います。各グループには、講義編の講師等がファシリテーターとして入る予定です。

当日の参加人数や議論の状況に応じて、進め方や時間配分を変更する場合があります。

現時点では、概ね次のような進行を予定しています。

① 自大学の課題と状況を紹介する

各参加者から、

- 今回取り上げた教育上の課題
- その課題について、誰が何を持っているか
- どの部分にボトルネックがありそうか
- どことどこをつながりを変えたいと思うか

を簡潔に紹介していただきます。

ワークシートの全項目を順番に読み上げる必要はありません。

② 他の参加者・講師と一緒にボトルネックを考える

他大学の参加者や講師から、

- 「その課題を一番よく知っているのは誰ですか」
- 「そのデータは別の部署も持っていないか」
- 「分析する人と、教育上の意味を考える人は一緒に話していますか」
- 「その問題を知っている人と、決められる人はつながっていますか」
- 「既にある会議や仕組みを使ってつなげられませんか」
- 「本当に不足しているのは人でしょうか。それとも接続でしょうか」
- 「その課題は、授業・学科・学部・全学のどこまで共有されていますか」
- 「別の部門や他学部につなぐと、見え方が変わりませんか」
- 「誰か個人ではなく、既存の会議や手順が“つなぐ役割”を担えませんか」

といった質問・コメントを行います。

正解を決めることではなく、他大学の実践や講師の視点を鏡として、自大学のつながりをもう一度見直すことを目的とします。

③ 班の中で共通するボトルネックや工夫を整理する

個別大学の課題を検討した後、

- どのような接続が切れやすかったか
- どのような工夫でつなげられそうか
- 他大学にも使えそうな考え方は何か

を班の中で整理します。

④ 全体で共有する

演習の後半では、各班から、

- 印象的だったボトルネック
- 共通して見られた課題
- 参考になりそうな接続の工夫

を簡潔に共有していただく予定です。

個々の大学の事例をすべて報告するのではなく、他の大学にも応用できそうな気づきを全体で共有することを目的とします。

6. 当日の時間配分（現時点の予定）

15:00～16:10 頃 グループワーク

各大学の課題を共有しながら、ボトルネックと接続改善の可能性を検討します。

すべての事例を同じ深さで扱うことにはこだわらず、当日の状況に応じて、共通性が高いものや議論が深まりそうなものを重点的に扱う場合があります。

16:10～16:30 頃 全体共有

各班で得られた気づき、共通課題、工夫等を共有します。

※時間配分は当日の参加人数や議論の状況に応じて変更する場合があります。

7. このワークのゴール

このワークの目的は、

「IR 担当者が足りない」

「FD 担当者を増やすべきだ」

「新しい会議を設置すべきだ」

という結論を出すことではありません。

大学の中には、課題を知る人、情報を持つ人、分析できる人、意味を考えられる人、決められる人、支援できる人が、既に存在している場合があります。

重要なのは、それぞれの人や機能が、教育改善という一つの目的のためにつながっているかということです。演習を通じて、

自大学では、どことどこをつなぐりを少し変えると、教育改善がもう少し動きやすくなるかを一つ考え、持ち帰っていただくことを目指します。

8. 事前ワークにあたって

ワークシートは、自大学の「正しい組織図」を作るためのものではありません。

また、すべての役割に必ず一人ずつ担当者が必要という意味でもありません。

一人が複数の役割を担っていることもあれば、複数の人や会議体が一つの役割を担っていることもあります。

むしろ、

「書いてみると、この役割を誰が担っているか分からない」

「必要な人はそろっているが、同じ場で話していない」

「担当者個人の人脈でつながっている」

「制度上は別々だが、実務上は意外とうまくつながっている」
といった気づきを、ぜひ当日の議論へ持ってきてください。

自大学を評価するためではなく、参加者同士で具体的な実践を持ち寄り、
人・情報・専門性・権限・支援を、どうつなげれば大学として教育改善を動かせるか
を一緒に考えるためのワークです。